

矢野遺跡出土の檜扇について

原 俊二

1. はじめに

出雲弥生の森博物館では、開館初年度の平成22年度末に、2011年春季企画展として、「東西南北二五〇〇年の交流－矢野遺跡の調査から－」と題した展覧会を開催した。

展覧会は、矢野遺跡の大規模調査の報告書が刊行され、調査が一区切りをしたことから、今までの調査成果をまとめ、矢野遺跡の弥生時代から近世・近代までを通史でとらえたものであった。

その中の、古代のコーナー（平安時代の「八野郷」）において、出土した檜扇を展示するとともに、復元模型を制作し展示した。

しかし、檜扇の写真を図録（原・高橋2011）には載せていないことや、調査報告書（原2010）でも、細かい点は記述していないことなどから、檜扇とその復元方法について、ここで改めて紹介することとする。

2. 檜扇について

檜扇は、桧や杉の薄板を数枚重ね合わせ、下端を一点で止めて、上端付近を糸で綴じ合わせたもので、扇形に開閉して、送風具として利用するものである。

島根県内の檜扇として有名なものは、松江市鹿島町の佐太神社が所蔵する平安時代の彩絵檜扇（国指定重要文化財）である。

また、身近な例としては、ひな祭りの、お雛様が手にしているのが檜扇であるが、意識して見ないとそうとは気付かないかもしれない。

出土檜扇の研究としては、近畿地方を中心とした古代の木製品を集成した町田章氏と上原真人氏の研究（町田・上原1985）や、古代都城を中心とした辻裕司氏の論考（辻1998）が知られている。

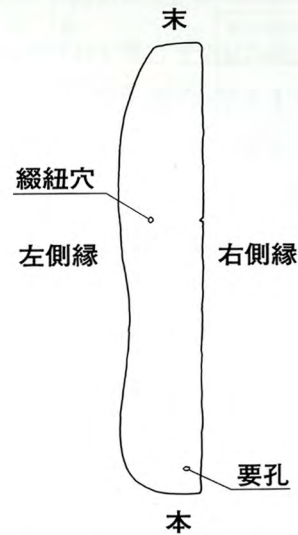


図1 檜扇部分名称図

ここでは、辻氏が扇具を団扇・檜扇・蝙蝠扇の3つに分類されていることから、その名称を用いることとする。

3. 出雲地方での出土状況

現在、出雲地方で出土した檜扇は、5遺跡6遺構である（表1）。

いずれも、完形で出土しておらず、要が外れて骨が1枚ずつ分かれた状態や、骨自体も折れて割れた状態で出土しているため、檜扇と識別すること事態も難しい場合があることから、気づかない例もあるものと思われる。

松江市では出雲国府跡1遺跡2例のみだが、出雲市では4遺跡4例の出土例が知られている。矢野遺跡のような檜扇と明らかに判明する例は、青木遺跡の1例のみである。

出土する遺構は、井戸・土坑で、それらの中に廃棄した状態で出土している。このため、檜扇が完全な状態では見つかっていない。また檜扇の年代も特定できかねる状態である。

4. 矢野遺跡出土の檜扇について

檜扇は完形で出土したわけではなく、骨の破片4片が出土したのみである。すべて、土坑SK2003から出土した。この土坑は、矢野神社東方およそ200mの地点に位置しており、平面形が楕円形である。断面形は2段掘り状の逆台形をなす。長径5.2m、短径3.6m、深さ1.0mである。

土坑埋土の中ほどから、須恵器（高台付皿）、土師器（播鉢、杯、小皿、柱状高台杯）、漆器碗、木製品（薄板、下駄、しゃもじ状木製品、合子の蓋）などと共に出土した。須恵器は9世紀、土師器の小皿と柱状高台付杯は13世紀、土師質の播鉢は13～14世紀である。

このことから檜扇の年代は、13～14世紀以降のものと考えられる。

檜扇の形態は、桧の薄板で、木取りは柃目取りである。骨が4片出土している（図1・2、写真1・2）。

もともと1枚の骨が、綴紐孔付近で上下に2つに割れている。完全に接合するわけではないが、割れ口の様子や、木目などから、ほぼ同一個体と思われることから、同形同大の2枚分の骨が出土していると考えた。

末は斜めに切り、本は丸くおさめる。右側縁は直線で、左側縁はS字状である。S字の上側の曲がりが大きくゆるやかで、下の曲がり小さく急である。木肌は荒割のままであるが、図2-1の裏面と図2-2の表面は、滑らかに仕上げられている。

滑らかな面の本側には、それぞれ斜め方向の擦傷が残る（写真3）。その面を向い合うように重ね合わせると、傷の方向と傾きとが同一となることから、この傷は扇の開閉に伴う傷と推定され、この2枚の骨は親骨にあたると考える。

骨の制作方法は、成形された厚手の板を、末から刃物で薄く均一に削ぎ取りながら骨を製作

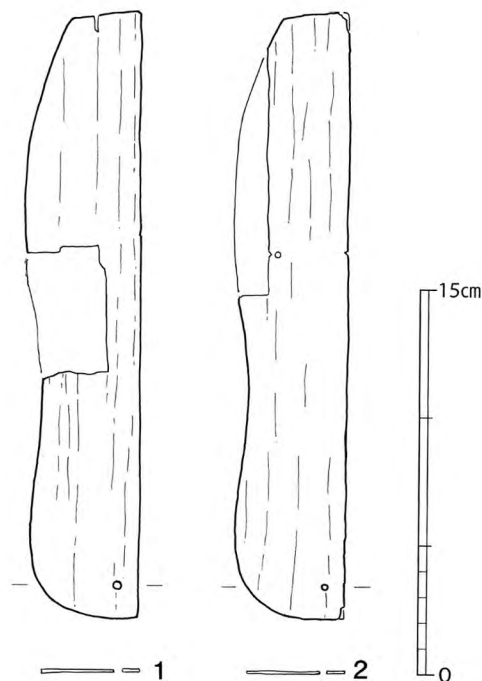


図2 矢野遺跡出土檜扇実測図（1：3）

すると言われていることから（国武ほか2010）、骨2枚を上下に重ね合わせてみたが、微妙に一致せず接合はしなかった。

長さ23.5cm、最大幅4.0cm、厚みは不均一ではあるが約0.1cmである。綴紐孔は直径0.3cmで、骨の横の中心から上寄り、左側縁から約1.5cm右側にあく。要孔は直径0.3cmで、末の右側縁寄りにあく。

5. 檜扇の復元について

実測図をもとに骨1枚分の形を復元し、これを厚紙に写して切り抜き、茶褐色で着色した。骨の重ね合わせは、重ねた上の骨を、下の骨の綴紐孔まで右側にずらしていく方法で、順次捻上げていった。20枚の骨で、開いた角度が105度となった。

綴紐は開閉を考えず、骨が固定され展示に支障が無いような紐の通し方とした。

要孔には、紐を通し、重ね合わせた骨が固定するように、こげ茶色のビーズ丸玉を両側に取り付けた（写真4）。

表1 出雲地方出土の檜扇

所在地	遺跡名	遺構	種類	数量	法量 〔〔 〕は残存長〕			樹種	木取り	年 代	掲載図面 番号	文献	
					長さ	幅	厚さ						
出雲市	矢野遺跡	B区 土坑S K2003	檜扇	2点	23.5	[4.0]	0.1	ヒノキ科アス ナロ属	柱目	13世紀～14世紀以 降	第226図18	原2010	
					23.5	[4.0]	0.1		不明		第226図19		
	三田谷Ⅰ遺跡	谷部流路	蝙蝠扇	1点	[15.2]	※1.6	※0.4	不明	不明		第129図14	鳥谷2000	
	青木遺跡	I D区 土坑S X50	檜扇	1点	23.5	[2.0]	0.3	ヒノキ属	柱目	8世紀中頃～9世紀前葉	第137図W081	今岡ほか2006	
	里方本郷遺跡	15区 拡張区	蝙蝠扇	1点	[15.5]	2.2	0.1	不明	柱目	奈良・平安時代	第81図182	中川ほか2008	
松江市	出雲国府跡	大舎原地区 4号井戸	蝙蝠扇	1点 ※2	[20.0]	1.2	0.4	不明	不明	11世紀後半～12世紀	第32図29	守岡2004	
				3点	[15.9]	0.75	0.2				第32図30		
					[16.0]	0.8	0.2				第32図31		
					[15.3]	0.8	0.2				第32図32		
			堂田地区 12号井戸	蝙蝠扇	6点	[9.8]	1.4	0.3	不明	不明	12世紀～13世紀	第22図 1	間野ほか2009
						[3.6]	1.4	0.3	スギ			第22図 2	
						[14.5]	1.4	0.5	不明			第22図 3	
						[6.9]	1.3	0.3				第22図 4	
		[9.1]				0.9	0.2	第22図 5					
		[8.3]	[1.0]			0.3	第22図 6						

守岡2004・間野2009をもとに作成 ※ 図面を計測 ※2 骨4枚が要で止められた状態

6. まとめ

矢野遺跡出土の檜扇について、企画展で展示したことから、今回改めて紹介する事とした。

出雲地方の檜扇は、蝙蝠扇がほとんどで、檜扇は青木遺跡出土例のみである。

また、矢野遺跡の檜扇は平面形が青木遺跡のように一般的な形ではなく、類例が無い形をしている。はたして檜扇として良いかどうか判断に困る点もあるが、形状からそのように考えてみた。この点については今後の類例の増加に期

待したい。

遺跡の立地条件にもよるが、檜扇は出雲地方のうち出雲市内から多く出土している。今回は、檜扇が出土した遺跡や遺構の評価には触れていないが、今後、検討を加え、檜扇が出土した意味を考えていく必要がある。

(付記)

復元品の制作は高橋周とともに検討を行った。

参考文献

- 今岡一三ほか 2006『青木遺跡Ⅱ（弥生～平安時代編 第3分冊（奈良・平安時代））』国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ，島根県教育委員会。
- 国武貞克・藤井裕之・吉岡直人・浅野啓介 2010「檜扇の製作に関わる新知見」『奈良文化財研究所紀要2010』，独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所。
- 辻 裕司 1998「古代都城出土の扇」『研究紀要 第4号』，財団法人京都市埋蔵文化財研究所。
- 鳥谷芳雄 2000『三田谷Ⅰ遺跡（Vol.3）』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ，島根県教育委員会・建設省出雲工事事務所。
- 中川 寧ほか 2008『里方本郷遺跡・山持遺跡4（5区・7区）』国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6，島根県教育委員会。
- 原 俊二 2010「中世の遺構出土遺物」『矢野遺跡 遺構編（第1分冊）』出雲市の文化財報告10，島根県出雲県土整備事務所・出雲市教育委員会，278～289頁。
- 原 俊二・高橋 周 2011『春季企画展図録 東西南北二五〇〇年の交流－矢野遺跡の調査から－』，出雲弥生の森博物館。
- 町田 章・上原真人 1985『木器集成図録 近畿古代篇』，奈良国立文化財研究所。
- 間野大丞ほか 2009『史跡出雲国府跡6』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書19，島根県教育委員会。
- 守岡正司 2004『史跡出雲国府跡2』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書15，島根県教育委員会。



写真1 図2-1の表面



写真2 図2-2の表面



写真3 左は図2-2の表面 右は図2-1の裏面



写真4 復元模型